

ヨーロッパにおける

東南アジア諸言語の研究について

西 田 龍 雄

筆者は本年（1963）の五月中頃から六月中頃まで約一ヶ月間（正確には33日間）文部省より派遣されたヨーロッパおよびインドにおけるアジア・アフリカ言語・文化研究状況調査団（団長岡正雄教授）の一員として、欧州各地を旅行した。ローマをはじめ、パリ、ロンドン、ブラッセル、アムステルダム、ライデン、ベルリン、ハンブルグ、コーペンハーゲン、モスクー、レニングラード、ウィーン、カルカッタの13都市を廻り、全体で約24の研究所、大学および博物館を訪れた。しかし、短期間であり、すでに休暇に入っている大学もあって、中には、必要な事柄さえも調査出来なかったところもある。それらの諸機関の設置形態、施設の規模、教育・研究の実情などについては、岡教授のもとで書きまとめられ、“アジア・アフリカ言語文化研究状況調査報告”として刊行される予定である（現在、その草稿が油印されて、一部に頒布されている）ここでは、研究状況の中、とくに東南アジア諸言語の研究に限定して述べてみたい。

東南アジア言語研究の現状調査を整理するにあたって、筆者はつぎのような観点をとってみた。まず第一にある機関において、どのような言葉が研究および研修の対象として取上げられているか、そして、第二に研究対象として取上げられた言葉の研究がどの面に及んでおり、その教育がどのようになされているか、問題の核心となるのは、この2つの点であろう。そして、はじめの観点にはさらにつぎの基準をたててみた。

東南アジアの全領域で、現在話されている言葉、過去に使われていた言葉を含めると、正確には計算出来ないけれども、概略150種位はあると思う。その中、目下国語として通用している言葉としては、東からベトナム語、カンボジア語、ラオス語、タイ語、ビルマ語、マライ語の6ヶ国語がある。これらの言葉はいずれも、外交上、通商上、そのほかあらゆる面から必須

の対象であって、各方面からの要求によって、程度の差こそあれ、研究され、また教育されねばならないのは、当然のことである。これらの言語が何らかの形で教えられていないのがむしろ不自然である。これに対して、上にあげたようないわば東南アジアにおける大言語ではなくて、かなり限定された地域の中に、あるいは特定の部族のみに通用している小言語の群れが無数に存在している。たとえば、その中でもかなり大きいグループに属する言葉としては、ベトナムの Moy 語、タイ・ビルマ地域の Mon 語、Karen 語、タイ・ラオ地域の Miao-Yao 語など Mon-Khmer 系の小言語や、Karen 系の小言語、Miao-Yao 系の小言語などが顕著な存在である。

ある研究機関において、これらの小言語が大言語と相まって研究対象として取上げられているという事情は、他の研究機関で大言語のみが対象とされている場合に比べて、単に研究対象の量が多いというのみならず、両研究機関の性格の間に、何らかの質的な相違が認められてよいように思う。前者のように、特殊な言語の研究も同時に進められているという状況は、その研究機関における東南アジア言語の研究が、少くとも研究体制としては、高い水準に及んでいることを示すものと理解して妨げがないであろう。

第二に、語学教育がどのようになされ、言語研究がどの分野に及んでいるかの問題にはつぎの基準をたてた。語学教育に関しては、小言語は、特殊な条件のもとでしか問題にならないのは当然であって、教育される言葉は、ほとんどが大言語に限定される。かりに、語学教育の方法を素朴な段階に分けると、

- ① その国の語学者のみが教えている場合
- ② 現地人がその国の語学者と協力して教えている場合
- ③ 現地人が中心になって、一定期間に集中的に教える場合

- a. 何らの機械をも用いないで教える
- b. テープコーダーを利用する（たとえば、現地人の発音を録音しておいて、それらを学生に自由に使わせるなど）
- c. 特殊な設備をもった聴覚教室を設けて、その中で教える。

① a の組み合わせはあまり問題にならないが、① b、② b と ③ c の組み合わせの間には教育方法としては、はっきりと一線を引くことができると思う。

研究分野については概略つぎの三つを考えることができる。

- I 記述研究 もつぱら現代語を対象として、その音素体系とか文法体系とか、語彙体系とかを分析して記述する。大言語の場合は、その語学教育と密接に関係する。
- II 歴史研究 個々の歴史文献の研究を中心に、その言語の歴史をたどる。
- III 比較研究 いくつかの言語の体系を比較して相互の関連性を明らかにし、言語を系譜づける。ときに比較研究の結果、それらの言語の共通体を設定する。

この中、記述研究と歴史研究は、基本的に要求される分野である。東南アジアの言語については、この2つの分野の研究が進まなければ、第三の分野で信頼し得る結果を出せないと思う。

さて、ある大学あるいは研究所で、かりに、ベトナム語、タイ語、ビルマ語、マライ語の講義があり、② b の方法でそれらの言葉が教えられていて、そしてまた、それらの言葉を含めた記述的、歴史的研究がなされているとする。

このような体制を東南アジア言語研究の現状の標準線であると一応仮定してみる。これに対して、たとえばある大学でベトナム語とマライ語だけが教えられているといった状態であったとすると、たとえその研究機関でベトナム・マラヤの地域研究が盛んであっても、我々にとっては、その機関において東南アジアの言語が本格的に積極的に研究されているとは云い難いのではないだろうか。たしかに個々の言語の研究乃至は研修が各地域の全般的な研究のために大きい役割をもつものであることは疑い得ないが。我々言語学の観点からすると、東南アジアの諸言語は、たとえば、タイ地域とかビルマ地域というのではなくて、もっと大きい地域—東南アジア全域を全体的につかむための一環と

して扱われておらなければ研究体制としてととのっているとは云い難いのではないだろうか。それ故、筆者は、上に掲げた最低四つの言語を一組と見做すべきであると思う。そしてそれらの研究と並行して、小言語の研究が進められているならば、その機関の東南アジア言語研究の体制が十分にととのっていると云い得るであろう。このようなまったく外面的な基準をたてて見ると、この基準を越える状態にあるのは（ドイツの実状は、筆者にはよくわからないが）、パリの現代東洋語学校 (L'École Nationale des Langues Orientales Vivantes) ロンドン大学東洋アフリカ研究学院 (School of Oriental and African Studies)、モスコの東洋語学校、アジア・アフリカ諸民族研究所 (Институт Народов Азии и Африки) である。これ以外の研究機関では、一二の言語が教えられ、すぐれた研究者がすぐれた成果を発表しておられるけれども、東南アジア言語の全体的な研究研修体制から判断した場合、やはりその機関は、上記の機関よりは、活動的でないと認めざるを得ないであろう。

パリの現代東洋語学校の機構などについては、すでに一般によく知られているために、とくに述べる必要がないが、ここで教授されている言葉の中で、東南アジア研究に関係するものをあげると、ベトナム語、ラオス語、シヤム語、カンボジア語、マライ語（とインドネシア語）、ビルマ語がある。教授方法は、各教室ごとにフランス人学者と現地人講師が配置されているが、授業には特別な設備をもたないで、テープコーダーを活用する程度である。つまり、上掲の②と b の組み合わせが採用されている。筆者は、その中2種類の講義（フランス人学者の講義と現地人講師の講義）を短時間傍聴させてもらったのみであるが、正直に言って、ここでの教授法よりは、日本の外国語大学の方が秀れているという印象を受けた。

周知のように、フランスには曾って極東学院 (L'École Française d'Extrême Orient) という東南アジア研究の中心がハノイにあった。そして、この機関自体は今でもコレージュ・ド・フランスの2階の部屋でなお活躍している。しかしこの研究機関では、残念なこと乍ら、目下は言語学の面での専門家は一人もおられない。パリにおける東南アジア言語の専門家としては、現代東洋語学校でクメール語とタイ語を担当しておら

れる F. Martini 氏, ビルマ語を担当される L. Bernot 女史, 同じくビルマ語研究家の D. Bernot 氏, そのほか 東南アジア言語全般を扱って多くの論文を発表している A. G. Haudricourt 氏をあげることができる。François Martini 氏はとくにクメール語とタイ語の語法の対照を主とした研究テーマとして, 数篇の論文を発表しており, たとえば, つぎの論文がある。

(Les expressions de "être" en siamois et en cambodgien. BSL. 52. 1956, La distinction du predicat de qualité et de l'épithète en cambodgien siamois BSL. 53. 1957-58) Denise Bernot と Lucien Bernot は東パキスタン (Chittagong) で調査の経験をもっておられ, いわゆる チン語 Khyang とビルマ語方言についてよい資料を提供された。(Les Khyang des Collines de Chittagong. Paris. 1958, Rapports phonétiques entre le dialecte Marma et le Birman. BSL. 53. 1957-58). 後者の論文は, ビルマ語 Marma 方言 (これは Maghī 方言とよばれたもの) と標準語 (Rangoon 方言) の比較を目的としているが, マルマ方言自体の記述が明確ではなく, 比較の方法も秀れていないと思う。A. G. Haudricourt 氏は, もともとタイ語・ベトナム語を研究したが, 現在では 東南アジア 全域に研究領域を拡げている Les phonèmes et le vocabulaire du thai commun. J. A. 236. 1948: Les occlusives uvulaires en thai. BSL. 48. 1952: De la restitution des initiales dans les langues monosyllabiques: le problème du thai commun. BSL. 52. 1956. のほか多くの論文がある。また Haudricourt 氏には Karen 語について, 2つの研究がある。Restitution du Karen commun. BSL. 42. 1945, A propos de la restitution du Karen commun. BSL. 49. 1953. これは Karen 語の中, Pwo Karen 語と Sgaw Karen 語を比較した研究であって, タイ諸語のたどった変化から類推して, Karen 語の共通体系を考えようとしたものである。たしかにタイ諸語とカレン語の変遷には, 初頭音や声調について顕著な並行性が認められるが, 同氏の資料となったのは W. C. B. Purser, A Comparative Dictionary of the Pwo-Karen dialect, 1922. Rangoon の小冊子のみである。この辞典では Pwo Karen の形の後に括弧に入れて Sgaw Karen 形があげられている。しかし, 共にカレン文字

を用いているので実際にはどのような発音であるのか, この辞典のみからはよくわからない。筆者は, 以前にカレン語を調査したときに, Haudricourt 氏の掲げている形が, 実際とはかなり違っているのを知って驚いたことがある。たとえば H 氏があげる Pwo an: Sgaw au は, 実際には現代語では Pwa [ɔ̃], Sgaw [ɔʔ] であった。ex. <足> Pwo [kɔ̃], Sgaw [k'ɔʔ], <たべる> Pwo [ɔ̃] Sgaw [ɔʔ] (いずれも高型トーン)

最近東洋言語の研究が急速に発展しつつあるが, 東南アジア言語の領域においても, 今は一つの発展期にさしかかっているのではないかと思う。フランスにおける 東南アジア諸言語の研究は, Savina, Cuaz, Migot, Diguët 諸師によって作られた年期の入った信頼し得る資料が次々と提供されることによって大いに進展し, 我々の研究もそれによって, 多くの恩恵を受けた。今でもこの種の仕事が発表されつつある。たとえば P. Guilleminet et J. Alberty, Dictionnaire Bahnar-Français I. 1959. II. 1963. このような資料の公表は今なお有難いことではあるけれども, 我々はこの辞典から, バフナル語がどのような性格をもった言葉であるかはよくわからない。つまり, この辞典におけるバフナル語の記述的研究が, 現在の我々の要求とは一致しないのである。まず対象とする言葉の体系を正確につかまえる記述研究が何よりも先行してなされねばならない。

フランスの東南アジア言語研究は, 簡略に云うならば, はじめに掲げた分野の中, I 記述研究と II 歴史研究が貧弱であるが, 従来の資料を使った III 比較研究の面では多くの仕事が為されている点に, 特徴があると云うことができる。

ロンドンの東洋アフリカ研究学院 (SOAS) の機構についても一般によく知られているからここでは省略したい。SOAS では東南アジア諸言語は Dept. of the Languages and Cultures of South-east Asia and the Islands で担当され, つぎの諸言語が教えられている。ビルマ語—Allott, Hlape, Sprigg 諸氏, マライ語—Barrett, Bottoms 諸氏, 古代および現代ジャワ語—Hooykaas 氏, モン語—Shorto 氏, クメール語—Jacob 氏, タイ語—Simmonds 氏, ベトナム語—Honey 氏。この Dept. での教授方法は上掲①

と a. または b. の組み合わせである。SOASの特徴としてはつぎの二つをあげることができると思う。第一にはスタッフがいずれも phonetics に通じていること、第二にはモン・クメール語の研究がとくに活潑であること。この Dept. の Acting Head の Miss Henderson は Reader in Phonetics であって、すぐれた音声学・言語学者である。今までに Lushai 語、クメール語、タイ語の音声記述とそれにもとづいた音素体系の整理をつぎつぎに発表しておられる。これらの仕事は、この方面の研究者として必読の論文である。

代表的な論文を掲げるとつぎのごとくである。Notes on the syllable structure of Lushai, BSOAS 12. 1948; Prosodies in Siamese. A study in synthesis, AM. I. 1949; The main features of Cambodian pronunciation, BSOAS 14 1952.

十数年前に発表された借用語の研究 The phonology of loanwords in some South-east Asian languages (TPS. 1951) も必読の論文であって、いわゆる unassimilated loan をどう扱うかを論じている。東南アジアの諸言語に共通する厄介な事実の一つは借用語の問題である。比較研究の場合には、はっきりと借用語とわかる単語は除外するけれども、記述研究ではその借用語の処理が極めて面倒である。Henderson 女史はこの問題を、polysystemic な観点から見るべきであって、一つの言語の中に三つの音素体系を考える必要があると云う。たとえばタイ語を例とすると単音節の単語 (cvv, cvvc c は子音 v は母音) あるいは単音節二つの結合から成る借用語 (cəcvv, cəcvvc) は一般タイ語の単語と同じ形であるから、これらの借用語を形の上から見分けることができない。この基礎的な体系を primary system という (たとえば、\ra:t <rāja>, -khre: _dit <credit> など)。これに対して、借用語であることはわかるが、とくに目立って primary system から区別できない形がある。これを "Naturalized" secondary system という。[cəcvv, cəcvvc から変形した Ci/u cvv, ci/u cvvc の形 pi:sa:t 〓お化け、ku/son 〓功德、善行、など]。最後にまったく断片的であって外来要素であることが明白な単語がある。タイ語では、二音節の単語で初めの音節が i. u. ə 以外の母音をもつ場合がこれにあたる (pôlit <police> cocvvc)。これを fragmentary

"alien" system とよぶ。

このようなわけ方は、大体、native speaker の意識とよく一致するものと考えられる。筆者は一つの言語を記述するのにいくつもの音素体系を認めるという主張には賛同したくないが、Henderson 女史はこの立場からタイ語、クメール語、モン語、ビルマ語にわたって借用語の形式を論じた。

音声学専門家の Sprigg 氏はもともとチベット語の記述をされていたが、Junction in Spoken Burmese (Studies in Linguistic Analysis 1957) でビルマ語の秀れた記述を発表した。これは難解乍ら有益な論文である。そのほか広東語を教えている Downer 氏の Phonology of the Word in Highland Yao. BSOAS 1961. は 1959-60 の間にラオスの北西部 Phu Khamteng Chungliang で調査した瑤語の報告である。

SOAS での Mon-Khmer 語の研究は、Mon 語の Shorto 氏、Khmer 語の Jacob 氏が中心になっている。Shorto 氏はモンの epigraphy などを研究していたが、最近では spoken Mon を記述して、A Dict. of Modern Spoken Mon 1962 を出版した。これは現代モン語のすぐれた辞書である。我々のところでもモン語、クメール語を中心に、この系統の言語の専攻を目指す人達が出て来ているが目下はやはり SOAS の研究には及ばない。東南アジア言語の研究で Mon-khmer 系の言語は極めて重要な役割を果たしている。極端な云い方をすれば、クメール語の研究が進まなければタイ語の研究も進み得ないし、モン語の研究が進展しなければ、ビルマ語の研究もある段階以上を越えることができないとさえ言うことができる。このような重要な言語を SOAS では盛んに研究している。Shorto 氏には、このほかに Word and Syllable Patterns in Palaung (1960) があって、Palaung 語の音素体系と単語形式の概観を与え、Jacob 氏は The Structure of the Word in Old Khmer (1960) で、pre-angkorian と angkorian のクメール語の特徴を説いている。

SOAS の学者の仕事は、当該言語全体に対する興味よりも、音声学上の興味からなされている場合も多いけれども、個々の言語の研究を今後より発展させるための基盤を提供する点で、この種の記述が東南アジア諸言語全体について、もっと広い領域に及んでいくこ

とを期待したい。そしてまた、その記述が音韻体系のみではなく、そのほかのレベル(文法体系・語集体系)についても同様に扱われることを期待したい。

SOASの研究分野は、Ⅰ. 記述研究(とくに音声記述)がとくにすぐれて、Ⅱ. 歴史研究も為されているが、それらに対して、Ⅲ. 比較研究は、ほとんど興味をもたれていないと云うことができる。

ソ連では、どのような言語学者がいて、東南アジアの言語についてどのような研究にたずさわっているのか、筆者にはよくわからない。言語学の専門雑誌“言語学の諸問題”(Вопросы Языкознания)には、東南アジア言語に関する論文はほとんど掲載されず、アジア、アフリカの諸民族(Народы Азии и Африки)に、たまに掲載される程度である。この雑誌(年6回発行)の1962年度には、1号にТ. Т. Мхитарян, О русской Транскрипции Для Бьетнамского Языка, (T.T. Mkhitaryan, Russian Transcription for the Vietnamese Language), 4号にЕ.В. Пузицкий, Спорные случаи русской транскрипции Бирманских слов (Puzitsky, Disputable problems of the Transcription of Burmese Words)の2篇、一いづれもロシア文字に転写する場合の問題が扱われているのみである。しかし、目下は急速に各言語の研究が進められているらしく、東洋及びアフリカ諸外国語(Языки зарубежного Востока и Африки)と名付ける言語概説シリーズの中に、筆者の知る限り、つぎの数種類の東南アジア言語概説が、すでに1960年以来刊行されている。

В.М. Солнцев. Быенамский Язык

1960 (ベトナム語)

А.С. Теселкин, Индонезийский Язык

1960 (インドネシア語)

Л.Н. Морев, Тайский Язык 1961 (タイ語)

Ю.А. Горгониев. Кхмерский Язык

1961 (クメール語)

Г.П. Сербюченко, Чжуанский Язык

1961 (チュアン語)

А.С. Теселкин, Яванский Язык

1961 (ジャワ語)

そして、これらの言語の辞典も数点編纂されている。辞典の編纂は科学アカデミーの出版局に属する辞典編

纂所が企画をたてて、各専門家に依頼する。すでに全体で87カ国の辞典が完成し、出版されている。その中には、ソ連国内の民族語が45種類含まれるが、東南アジア言語の辞典としてはつぎの数点がある。

ベトナム語・ロシア語辞典 (36,000語)

インドネシア語・ロシア語辞典 (45,000語)

ビルマ語・ロシア語辞典 (5,000語)

ロシア語・ベトナム語辞典 (24,000語)

ロシア語・インドネシア語辞典 (10,000語)

ロシア語・ビルマ語辞典 (7,500語)

ビルマ語・ロシア語辞典, ロシア語・ビルマ語辞典はいずれも、語彙数は多いとは言い難いけれども、内容は非常に有用である。

1956年にモスコー大学の附属機関になったモスコー大学付属東洋語大学では、ベトナム語、カンボジア語、インドネシア語、タイ語、ビルマ語が教えられているということであったが、実際の授業内容は明らかではない。

レニングラードの大学には、東南アジア言語の専門家がいます。この大学の Ученые Записки の No. 305 は“東方民族の諸言語”(Языки Народов Востока)の特集であり(1961刊)、その中には、ベトナム語4篇、ビルマ語1篇の論文が含まれている。後者の論文名を掲げると、

А.И. Еловков, Сложные глаголы в бирманском языке “ビルマ語における複合動詞について”

(pp.51-64).

また No.306 は“東方諸国の文献学、(Филология стран востока)の特集であり(1962刊)、ベトナム語およびビルマ語について、それぞれ一篇が掲載されている。後者の論文名は、

А. И. Еловков, О частях речи в бирманском языке “ビルマ語の品詞について”

モスコーのアジア諸民族研究所には、東南アジアの部門は30名、インドシナ部門に50名、ベトナム(朝鮮、蒙古)の部門に30名、言語学部門に100名の専門学者がいる由であったが(全所員数は500~600人)、この中、ここである東南アジア諸言語を専門とする学者が幾人いるかははっきりわからない。また東南アジア領域に属する個々の言語についての実証的研究(記述的、歴史的、比較)のすぐれた成果は目下の段階では見当たらない。しかし、ここ数年の中には、良い研究がつぎつ

ぎと発表されていくであろうと思われる。今はその準備期にあると云えるのではないだろうか。

アメリカでは、ある言語の専門家であるとばかり思っていた人が、突然に別の言語の文法を発表するといったことが珍しくないと思う。つまりアメリカの言語学者は、言語の体系そのものに興味をもって、すべての言語に適用できる技術をまず具えているからである。このような早業はヨーロッパの学者には好まれないのであろう。Khasi の報告を書いた Rabel 女史は、240 時間で材料を集め、一冊の書物を作っている (Khasi, *A Language of Assam* 1961)。その内容には、いろいろ批判されるところがあるが、その言語の概略をかなりの正確さで手早くつかめるという点で、それが我々によく役に立つのである。これに一番近いのは、学問の方法は異ってはいるが、SOAS の Henderson 女史によって代表される一群の学者であらう。

言語の現地調査とその結果の記述については、いろ

いろの問題があるけれども、短期間に手取り早く、よい結果を出すためには、如何にして、手際よく当該言語の音素体系を発見することができるかにかかっていると思う。勿論、その操作のみでは当該言語の体系が解明できたことにはならないのは十分に承知しているが、まずこの段階まで到達しなければ、調査にあたっての成果は何ら導き出せない。この点、SOAS の学者には強い技術がある。我々も、この面を軽んじることは許されない。

日本の東南アジア言語の教育や研究は、全般的に見て、ヨーロッパにおける教育や研究に比べて、決してとくに劣っているわけではないと思う。ことに教育の面では、日本の外国語大学の方がより進歩していると思われる。そして我々にも実地調査の機会を十分に与えられ、同時に日本に滞在する理解のある現地人の協力を受ける機会を多く得ることが出来るならば、研究の現状も一段と前進することになるであらう。